

# コロナ禍における訪問教育の現状と課題

～全国アンケート調査から～

○榎木暢子 高木 尚  
(愛媛大学大学院教育学研究科) (日本福祉大学)  
KEY WORDS: コロナ禍 訪問教育 教育保障

## (目的)

新型コロナウイルス感染症の流行により、2020 年 3 月からの突然の全校一斉休校に伴い、訪問教育も中止を余儀なくされた。2 か月余りの休校後も病院や施設での訪問の再開は難しく、通学による教育に比べ圧倒的に少ない授業回数・時数がさらに減り、教育機会が失われている。重症児の教育において大切にされてきた、直接触れることによる取組みが難しく、教育内容の質の低下も危惧されている。本研究では全国訪問教育研究会が実施した全国アンケート調査から、コロナ禍における訪問教育の現状と課題を明らかにする。

## (方法)

対象：訪問教育を実施している特別支援学校 382 校  
全国訪問教育研究会会員 159 名

期間：20XX 年 10 月上旬～10 月末

配布：質問紙、Google フォーム QR コード・URL を郵送

回答：郵送、Web 回答（Google フォーム）

質問項目：①訪問形態と児童生徒数、②休校中の訪問生の様子、対応、保護者・病院・施設からの要望、困ったことや心配したこと、③学校再開後の訪問教育の実施状況、感染防止対策、訪問生の様子、保護者・病院・施設からの要望、困ったことや心配したこと、④2 学期既往の対応、新たに取組んでいることや心配なこと、⑤その他

分析方法：家庭（在宅）訪問、病院訪問、施設訪問の 3 つの訪問先ごとに分類し、各項目のキーワードを抽出した。キーワードを基に KJ 法的手法を用いて、訪問先別の現状と課題を分析した。

回答方法：自由記述

研究倫理上の配慮：個人及び学校情報の保護、発表について依頼状で説明し、回答をもって同意が得られたとした。

## (結果)

### 1. 回収・回答数

(1) 回収数 郵送 117 通、Web73 通、計 190 通

回収率 35.1%

(2) 訪問先別回答数

家庭（在宅）訪問：150 通

病院訪問：46 通

施設訪問：52 通

### 2. 回答内容

(1) 訪問教育再開前後（共通）

訪問教育再開前の困ったこと、心配したこととして「人との関わりが減った」「身体が硬くなった」「生活リズムが乱れた」などがあった。

訪問教育再開後の良かったこととして、「以前より画面を注視することが増えた」「意欲的になった」などが挙げられた一方で、困ったことなどとして「なかなかペースが戻らない」「学習の積み重ねが崩れた」「また休校になるのでは？と不安がっている」などが挙げられた。

(2) 感染防止対策の徹底による影響（共通）

感染防止対策を徹底しなければならないことは当然であるが、感染防止対策による訪問授業への影響も大きかった。週

1 回をみの訪問、1 回の授業時間が 10 分、30 分等、回数・時間数ともに制限されていた。また、訪問生に直接触れてはいけないとされたため、身体の手組みができなかったり、マスク越しで訪問生の表情がわからずコミュニケーションがとりにくかったりするなど、学習上の課題も明らかになった。教材の消毒や個人専用にするなど、教材準備や持参上の課題も挙げられていた。教員の負担として、授業中の装備の多さ、着替えや消毒液の携帯など、荷物の増加、感染させたらという心理的負担、マスクや消毒液、エプロンの購入などの経済的負担が挙げられた。

(3) 訪問先別の状況と課題

#### ①家庭（在宅）訪問

感染防止対策について、家庭へウイルスを持ち込みたくないが、季節によって換気が難しい、部屋が狭くソーシャルディスタンスが取れない、着替える場所がなく、玄関先で着替えるなどが挙げられた。福祉サービスが使えないことにより、保護者の負担や孤独感への心配の声が多かった。

#### ②病院訪問

対面授業ができず、遠隔授業は授業時数に数えられないため、年間指導計画の見直しや進級・卒業への懸念が多かった。感染防止対策として、病院への健康チェックカードの提出、病棟に入る前の問診等があった。また、複数の訪問生が入院している病院では、病棟間の移動の禁止、複数の病室への入室禁止などがあり、1 日に複数の病院への訪問を避けるように言われた学校もあった。遠隔授業については、機器の扱いやインターネット環境、病院側の人手の問題が挙げられていた。

#### ③施設訪問

長期間の休校により、生活リズムが乱れ、ストレスが溜まり、自己刺激行動が増えた訪問生も複数いた。マスク越しで訪問生の表情がわからずコミュニケーションがとりにくい、接触禁止で身体の手組みができないなどの学習上の課題が挙げられていた。過年度生の保護者から、ようやく訪問教育を受けられることになったのに、授業が行われないまま、卒業になるのか、施設への働きかけを問われた学校もあった。一方で、学習課題を出してほしい、オンライン授業をしてほしいなどの要望もあり、施設側からの訪問教育への期待もあった。

## (考察)

行政やマスコミも「学びを止めない」と繰り返していたが、学校再開後も、訪問教育では病院や施設の度重なる閉鎖や、感染防止のための欠席など、定められた授業回数・時数を修了することが困難な状況が続いていた。教員定数の問題から学校再開後も授業を増やすことはできず、授業時数が満たされないまま、進級・卒業したことが推測される。授業時数を満たすことができない理由の 1 つに学級定数の問題がある。訪問籍と通学籍を別の学級として設定し、さらに個に応じた柔軟な学級編制ができる学級級定数の設定が望まれる。

(KASHIKI Nagako, TAKAGI Hisashi)